Hanna Diskin, *The Seeds of Triumph, Church and State in Gomułka's Poland* (Central European University Press, 2001)

加 藤 久 子

(一橋大学大学院社会学研究科博士課程)

Book Review: Hanna Diskin, *The Seeds of Triumph, Church and State in Gomułka's Poland* (Central European University Press, 2001)

KATO, Hisako

Graduate School of Research Course in Social Sciences, Hitotsubashi University

1 内 容

本書は、ポーランドにおける民主化のダイナミクスを、党と教会との相互関係に基づいて説明したものである。方法論として「システム・アプローチ」に基づき、カトリック教会を「政策環境: Policy Environments」の1つととらえて、「教会や他の諸環境が政府の政策立案に影響を与えた度合の問題に焦点をあて、そのパワー・バランスについて検討を加える」[本書 p. 2]ことを目的としている。従って、筆者の視点は、2つの主体の対立ではなく、その対立から生じる妥協・合意形成や、両者の共有領域に向けられていることが本書の特徴として挙げられる。国内の各教会メディアや国外での報道などにに基づき、双方のリーダーの発言を中心に分析が進められているが、特に、その中心となるのは、ゴムウカ党第一書記とヴィシンスキ首席大司教である。前書きで、筆者は、この2人の指導者に多くの共通点を見出し、強い関心を示している。そのような見方が調査や分析に影響を与えたことはないとしながらも [p. vii], 全編を貫く本書の基調となっているのは事実と言え、また、それが本書の個性ともなっている。

全体の構成は、「第一次ゴムウカ政権期 (45-48年)」「スターリン期」「第二次ゴムウカ政権期 (56-70年)」「結論」、そして、エピローグとして付け加えられた「ポスト・ゴムウカ期 (現在まで)」の5部から成り、力点が置かれるのは2度のゴムウカ政権期である。各部は、ほぼ一定の形式をとっており、前半では、「教会の状況」「国内での信仰の状況」「バチカン」「PAXなど諸団体」「ソ連との関係」など教会を取り巻く「諸環境」が取り上げられ、後半では、党の政策がさまざまな視点から説明され (政策・法的根拠・イデオロギーなど)、また、そのような政策を「抑圧」「譲歩」という2つの傾向に分類し、分析が行われている。

第1部の「第一次ゴムウカ政権期」については、教会の姿勢について、「教会の対ナチ協力」などといった「ステレオタイプの説明」は否定しつつも [p. 10], 共産党との関係においては、教会ヒエラルキーの「妥協」やプラグマティックな (場合に応じて、体制に協力しさえする) 戦略を主に取り上げながら説明する [p. 13-16]。同様に、党の側でも、指導者や軍隊が宗教的

セレモニーに参加するなど、儀式・発言など現実の活動レベルでは、宥和的傾向が示されている [p. 52-56]。もっとも、これは、党が、ポーランドのカトリックが常にナショナリズムと結びついているということを見出した上で、国家再建期の方策として選んだ手段であり、一方では、教会内部の分節化 [p. 42] や世俗化を推し進める政策が取られたことも指摘されている。

第2部にあたる「スターリン期」には、党による社会一般への締め付けは著しく強化され、教会も大きな打撃を受けたが、それと同時に、以前と同様に、公式の場で教会を認める発言があったり、公的儀式や休日の巡礼に多くの群衆が参加するなど、党のイデオロギーと直接対立しない領域においては、教会の活動は公然と続けられた時期とされる [p. 101-106]。

その後、第3部の「第二次ゴムウカ政権期」については、「1945-1948年の教会が体験したほど広範な自由への回帰は見られない」と指摘され [p. 206]、現実には、1958-1960年代前半にかけて、党と教会の対立はピークに達する。また、最後にエピローグとして付け加えられた70年代以降については、政治的な「反対派」が登場し始める中、教会の態度の硬化（保守化）が指摘されている [p. 226]。本書においては、このように多様な相互関係の中で、終始一貫して、両者の対立と妥協・宥和という2つの側面が均等に描き出される。そして、筆者は、ヴィンスキ枢機卿の強固な党への対決姿勢を取り上げ、1956年以降における枢機卿のそのような姿勢が、後に党の政策に「フィードバック」されたことを強調する。このような党と教会の相互関係こそが、後に生み出された「20世紀末の政治的ドラマ」の起源、つまり、本書のタイトルである「勝利の起源」と名づけられているのである [p. 217-220]。

このように、党と教会をめぐる背景が大きく振れる中で、各時代を「対立の時代」「宥和の時代」などとは簡単に名づけられない、対立も宥和も入り混じった相互関係が存在することを本書は明らかにしている。各時代において、「対立」や「宥和」と名づけられた状況も、多様な現実を指し示すものである。そのような相互関係の中で進行した、漸進的な政治・社会変動のプロセスを非常に緻密に描き出した点が、本書の最大の功績と言えるだろう。

そのような中で、敢えて本書の問題点を挙げるならば、全体の構成として、各項目の記述が1～3ページ程度の細切れになっており、全体の流れや諸要素の関係が見えにくい傾向にあると言える。また、「エピローグ」として、かなりの分量を費やして70年のゴムウカ退陣から今日に至るまでの教会の諸活動について解説・問題提起しているが、結論の後にさらに問題提起を行う形になり、本書の目的を分かりにくくしている。

また、本質的な問題として、本書のベースとなっている「政策環境」あるいは「環境」という語が十分に検討されないまま用いられているため、やや印象論的な用法にとどまっているのが惜まれる。

さらに、他の東欧諸国との相対において、ポーランド社会の特殊性を強調する言説が散見されるが、その特殊性を理論や地域理解へのチャレンジとしてどのように還元していくかという点は、筆者だけではなく、読者にも残された課題であると受け止めた。

2 本書の位置づけと展望

民主化の要因については、基本的に、国内外におけるさまざまな要素が複合的に影響しあったものと考えられるが、従来の研究においては、そのような諸要素の中で、政治家・政党（政治的諸集団）などの駆引きや判断に重点が置かれてきた。確かに、体制が変動する瞬間に着目

すれば、そのような政治的判断を重視するのは当然と言える。しかし、体制変動に至るプロセスを解明するためには、旧体制の存続を不可能にし、最終的な政治判断を促す条件を作り出したエージェントについて考える必要がある。筆者が、全体の構成や論の展開に問題を生じさせながらも詳細に記述した「エビログ」は、1989年前後の変動プロセスの連続性、あるいは切断・矛盾を考える上での問題提起にもなっており、多元的民主主義の定着過程を理解する上でも示唆を与えていると言えるだろう。

筆者は、そのようなエージェントの一例として教会を取り上げ、党の政策と教会の対応を分析していく。そのような試みは、「内的要因は限定的にのみ作用したという、一般に支持されている現在の理論に反するものである」[p. 2]とし、体制変動をめぐる理論に一石を投じていると言える。また、「環境」としての教会を取り巻く「環境」を、さらに分析するという二重構造をとることによって、カトリック教会の政治的主体としての側面を浮き彫りにすることに成功している。

従来、ポーランドの国家とカトリック教会の関係については、さまざまなレベルで盛んに言及されて来た。一元的な支配を志向する国家の枠組の中で、異なるイデオロギーと利益を持つ教会がどのように機能していたかを明らかにすることは、社会主義国家の様態を歴史的に明らかにするとともに、国家－社会関係について理論的検討を加えるための材料として意義を持っている。しかし、従来の研究においては、教会はややもすれば「反体制活動の砦」のように描かれ、党に対して批判的な活動を行った諸個人・諸団体の行いが羅列される傾向があった。したがって、国家と社会の関係も、硬直的な対立関係として理解され、両者の接点や共有領域について論じられない、という課題を残して来た。本書においては、政治領域にほぼ限定して党と教会の関係を論じることで、双方の独自のイデオロギーや価値から離れ、党と教会を併置した上で考察することを可能にしていると言える。

もっとも、これは、教会の意思決定や態度表明を、宗教的指導者のリーダーシップへと集約し、彼らを政治的指導者と並列に扱うことで獲得した客観性であり、この手法にも問題があるのは事実である。しかし、前述したような価値論的な国家－社会関係理解を超えるために、一定以上の役割を果たしていることは評価できるはずである。

以上の点を踏まえて、本書における問題提起をより精緻なものとして生かすために、党と教会両者の合意形成過程をよりつぶさに見て行く必要があるだろう。特定の利害について、両者が対立と妥協を繰り返しながら変質していくプロセスを追ひ、また、その過程で、党と教会、それぞれの内部における見解の相違や多様性に着目することで、社会主義国家における社会の質的変動がどのように生じたか、明らかにすることが出来るのではないだろうか。